

グローバル社会における「文化的なもの」の共時性

Synchronicity of the cultural on a Global Society

白石 哲郎

要 旨

後期近代に加速したグローバル化は、一国民国家を超越した規模での「社会的なもの」の再編をおよぼした。同時にこの趨勢は、従来の「文化的なもの」の形式と解釈内容、社会関係および社会制度との相互作用の様態において徹底的な変容をともなうものである。

なぜなら我々は、言語を母体とする象徴的な媒体や諸実践をつうじた多層的な意味の伝達のなかで、政治的・経済的システムの再帰性と不可分に関与しているからである。

本稿の目的は、カルチュラルターンの見地に立った社会学理論の創発可能性を担うグローバル化論を概説することで、文化的なものを貫く今日的特性、すなわち「共時性」の特定化を試みることにあ

る。

キーワード：グローバル化、文化的なもの、カルチュラルターン、共時性

1. はじめに

実際問題として、「文化 (culture)」について「それが何なのか」と問われれば、多くの人

が漠然とした直観的イメージで答えざるを得ないのではなからうか。社会科学の内部でも、社会的諸事象に従属する領域、あるいは分析対象からあらかじめ取り外された残余領域と位置付ける思考的潮流が根強い (佐藤・吉見編 2007)。このような文化の付帯的な扱いは、マルクス主義の史的唯物論の「伝統」(経済的土台による宗教的・哲学的・芸術的観念の規定) にとくに鮮明である。

本論に入る前にまず、文化の語源と語義の変遷について簡潔に述べておく必要がある。文化の語源は「耕作」、「教養」、「修養」、「崇拜」などを意味するラテン語の *colere* にあり、その語義が「個別の生活様式」-啓蒙思想の根幹を成す普遍主義への反動的ロマン主義を孕む-

や「学問」・「芸術」といった今日でも広く想起されるものとなったのは、18世紀末から19世紀にかけてである (Eagleton 2000; 佐藤・吉見編 2007)。また、近代の到来まで文化は、今でこそ対置的な関係 (観念的なものと唯物的なもの) で捉えられているが「文明 (civilization)」と同義語として使用されていた。なぜならば文明も技術、都市、制度の物質的高度化を意味するようになるまでは、「人間に備わった教養のありようをさす」(佐藤・吉見編 2007: 29) ことばであったためである。実際、知的および人格的に洗練された市民の状態を表す *civilitas* (文明の派生語) の存在が、文化同様に文明が教養や修養を語義として備えていたことを示唆している。

W. オグバーンの「物質的文化」(科学技術)、「非物質的文化」(法律、知識、倫理)、P. ソローキンの「波動」(時代ごとの文化優越の循環) に方向づけられた「観想的文化」、「観念的文化」、「感覚的文化」、G. ジンメル

(心あるいは精神)、「客観的文化」(学問, 芸術, 科学技術, 礼儀作法, 法律, 道徳), A. ウェーバーの「社会過程」と「文明過程」から自律した「文化過程」(人間の情緒の所産としての理念, 思想, 宗教的信条, 芸術分野における直観などの動き)といった黎明期の社会学における文化概念の多くは、「人間の獲得した知識, 信仰, 芸術, 道徳, 法, 習慣その他あらゆる能力と習慣を含む複合的な全体」(E. B. タイラー)という, とくに文化人類学からの部分的踏襲ないし援用が特徴であり, 独自の定義に乏しいという側面は否めなかった。

こうしたある種の停滞状況に一石を投じ, 社会学理論の脈絡における文化研究を前進させたのが, A. L. クローバー, C. クラックホーン, T. パーソンズである。彼らは, 文化に「記号作用」を本質とする「シンボル (symbol)」という定義づけを行った。クローバーとクラックホーンは「観念や価値を伝達するシンボルとしての行動パターン」(Kroeber and Kluckhohn 1952)として, パーソンズは「シンボルとして作用し得る」(Parsons 1961=1991: 24) 四つの構成要素 (認知的なもの・表出的なもの・評価的のもの・実存的なもの) の体系として文化を捉えた。パーソンズらによる専門概念化の努力は, 人類学的定義と不即不離でありながらも一線を画すような性質を備えた社会的用語としての文化の形成に寄与することとなった。

シンボルとは記号のなかでも, ある実在物の状況をそのまま表現する「シグナル (signal)」に対し, 実在物に関する表象 (観念・心象・感情イメージ) を直接代理する「高次シグナル」(実在物自体は副次的な意味として間接代理される) である (川本ほか編 1982)。また, シグナルが, その知覚主体に, 実在物に即応した「行動を命ずる手段である」のに対して, シンボルは諸表象の伝達とともに, それら主観に関わる意味を「受け手」側に連想させる, 言わば「思考の道具」(Langer 1957=1960: 75) でも

ある。

シンボル性の記号という「文化的なもの (the cultural)」の位置づけは, 「社会的なもの (the social)」の解明が目的であったとはいえず。デュルケムのトーテミズム研究, M. モースの「贈与と交換」の考察, M. ウェーバーの「理解社会学」, 「資本主義の精神」の因果帰属研究の系譜に連なるものである。

デュルケムは, オーストラリアの部族社会における宗教研究のなかで, 氏族の名, 先祖の霊, 非人格的な神の聖性といった意味を表現し, トーテム種に対する「集合表象」を不断に喚起させるような紋章を「トーテム的記号」と呼んだ (Durkheim 1912)。

モースは, トロブリアンド島のクラヤアメリカ北西部のポトラッチ (贈与・受領・返礼という三つの義務に貫かれた諸部族における交換儀式) の単位となる財産のシンボル性について暗に言及している (Mauss 1925)。贈与交換とは共同体の道徳的・経済的秩序を安定させる「全体的給付」に他ならず, そこで競争的に交換され, とくに誇示的に破壊されることさえある装飾品や武器, 銅器などは所有者 (主に首長) の富だけでなく, 彼の威信と矜持, さらに宗教的諸表象 (神話, 超自然的効用, 神や精霊への畏敬の念) を証明および表現する記号と見做し得る存在である。

ウェーバーは, カルヴァン派プロテスタントの禁欲的職業倫理が, 経営と労働を「天職」として自己目的化する資本主義の精神を意図せざるかたちで誕生させたと指摘した (Weber 1920)。また彼は, 社会学は主体の「主観的意味」の理解をとおして「社会的行為」(主体の意味が他者の行動と関係を持ち, かつこの過程によって左右される行為) の過程と結果を因果的に説明しなければならないとした (Weber 1922)。ウェーバーの言う世俗内禁欲の職業エートスも社会的行為も, クローバーとクラックホーンによる文化概念と同様に, 結局のところ人間

の「身体」を媒体として意味伝達するシンボルである。

クローバーら20世紀の社会学者が強調したシンボル性について、今日では「文化というものを定義する際の中核要素といってよい」（宮島編 1995：54）と一定の評価がなされている。

ただ、従来の社会学における文化的なものの研究は、西欧国民社会を暗黙の前提としたものであったことを付記しておかなければならない。例えばパーソンズが想定する「文化システム」（シンボルの集合）は、共同体成員の行為とアイデンティティの安定および統合を本来的性質とする「国民文化」の範疇に包摂して差し支えないものである。

しかし、20世紀の後半から急速化したグローバル化は、近代国民国家の統合力を相対的に弱体化させ、いままでの経済的・政治的制度や社会関係を対象とする「認識枠組」では充分に説明できない社会的なもの（新自由主義経済・電子的株式市場・世界都市・ディアスポラの共同体・多数の移民労働者を取り込む雇用形態の流動化など）を新たに顕在化させた。

グローバル化は「本質的に複雑で多次的なものであり、これまで我々が伝統的に社会を把握するときの基準としてきた概念的枠組に圧力を加えるものだということを証明している」（Tomlinson 1999=2000：35）。そして、この趨勢に方向づけられるかたちで既存の文化的なものも、その形式と内容、そして社会的なものとの相互作用やそれによってもたらされる影響力の範囲や深刻さにおいて決定的な変容を被ってきた。

社会的なものと文化的なものは、分ち難い相即的關係に規定されているにもかかわらず、従来の社会学は前者の分析に軸足を置いてきた。しかし、図らずもグローバル化が時代に対応した「存在論（Ontologie）」の構築という課題を提起したことで、むしろ今日の文化的なものの特性や構造の説明を重視する「カルチュラル

ターン（cultural turn）」という方法論上の「転回」が社会学においても重視されるようになってきている（丸山 2010）。

本稿の目的は、カルチュラルターンの実践に依拠した社会学理論の創発可能性を担う、「多次元性」を前提とするグローバル化論のなかでも、とくに文化に関する議論の概説を通して、現代の文化的なものを貫く特性を焦点化することにある。

2. 近代制度に内在する相互行為としての文化 — A. ギデンズ

A. ギデンズは、前近代の伝統的秩序と「モダニティ」（封建時代後の西欧に端を発し、20世紀を通してその影響力が世界的なものとなった社会制度や行動様式）との「非連続性」を規定する条件として、社会のダイナミズム—速度と拡がり、影響力の深刻さにおいて過去に類を見ない—の三つの源泉を挙げる（Giddens 1990, 1991）。すなわちそれは、「時間と空間の分離」、「脱埋め込み」、「制度的再帰性」である。

まず、18世紀末からの機械時計と西暦の普及によって、彼が「空白な時間」と呼ぶ、万国共通の標準的時刻が確立された。さらに、今度は世界地図が広大な相互行為領域の存在を人々に知覚させていったことで、「空白な空間」—遠く隔たった他者との非対面的な相互行為の空間—を発達させた。こうして「場所」（地理的にきわめて限定された物理的行為環境）から分離した時間と空間は、列車の時刻表が明証するように近代において再結合したのであり、人々の社会活動を広範囲にわたって秩序づけるようになった。

時空間の分離を前提条件とする脱埋め込みとは、社会関係がローカルな対面的状態から引き離され、時間と空間の「無限の拡がり」のなかで再構成されることである。換言すれば、その場に居合わせない遠隔地に暮らす他者との相互

行為が絶えず営まれるようになることを意味している。またギデنزによると脱埋め込みは、我々からの「信頼」（無知や情報不足を括弧に入れることにもとづく確信）に依拠した「抽象的システム（abstract system）」（貨幣を典型とする「象徴的通標（symbolic token）」と「専門家システム（expert system）」）によって促進されるという。貨幣は個人と集団の実質的な条件に左右されることなく流通可能な交換メディアであり、交易にせよ投機にせよ経済活動の範囲を押し広げてきた。

そして専門家システムも、高い論理整合性を備えた合理的な知識と技術の体系ゆえに、「実行者」と「クライアント」の個別な事情からは独立して有効性を発揮できるのであり、食品、薬、法的知識、建築物、交通・通信技術といったじつに多様な形態で我々の物理的生活環境のほぼすべての領域を体系づけている。専門家システムは、間断なく我々をその秩序のもとに参入させることによって、「象徴的通標と同じく、社会関係を前後の脈絡の直接性から切り離していく」（Giddens 1990=1993：43）のである。

制度的再帰性とは、人間の行為に本来的に内在する「行為の再帰的モニタリング」とは区別されるものであり、「社会の現実の営みは、その営みについて得た知識に照らして不断に修正されていくこと」（Giddens 1990=1993：58）の影響が、社会関係や制度の再編というかたちで徹底化されることである。とくに社会科学の知識は重要な役割を果たすことになる。例えば社会学の理論や概念は、参照されることをつうじて行為者、組織、制度に社会的な思考様式を獲得させ、結果的にそれら「研究対象を再帰的に再構築していく」（Giddens 1990=1993：61）のである。

ギデنزは、国民国家を基盤とするモダニティの四つの制度機構—「監視」・「資本主義」・「軍事力」・「工業主義」—を挙げるが、これらのグローバル化にも上述した三つの要素が深く関与

していると主張する（Giddens 1990,1991）。彼は、近代的制度に関する四分類に対応させてグローバル化の四つの次元—「国民国家システム」・「世界資本主義経済」・「世界の軍事秩序」・「国際的分業」—を提示するが、モダニティの徹底（グローバル化）に特徴づけられる「高度近代（high modernity）」の出現を促した要因を、とくに脱埋め込みと制度的再帰性に特有の外部拡張的性質に求めている。「モダニティは、本来的にグローバル化していく傾向がある—この点は、近代の諸制度がもつ最も基本的な特性のなかに、とりわけ脱埋め込みと再帰性という一部の特性のなかに明示されている」（Giddens 1990=1993：84）。

ダイナミズムの源泉に内在する「普遍化する特性」がモダニティの活動領域を拡張させてきた事実は、まさにギデنزがグローバル化の「基本的側面」と見做す「ローカルな文脈から「遠く離れた」社会的な出来事や関係の絡み合い」（Giddens 1991=2005：23）の強化を物語っている。

ギデنزのモダニティ論あるいはグローバル化論において、文化は近代的諸制度の背後に存在する根源的要素としての相互行為と位置づけられている。モダニティの制度機構のなかでも文化ときわめて密接な関係にあるのが工業主義であり、その国際化は機械技術の世界的普及とともにコミュニケーション技術の変革をもたらしたという（Giddens 1990）。

なかでも電子メディア（ラジオ、テレビ、映画）の進歩は、「離れた出来事の日常意識への侵入」（Giddens 1991=2005：29）という経験を日常化させた。ギデنزは、高度なコミュニケーション技術が媒介様式となることで「文化のグローバル化」（脱埋め込みの拡大）が促され、そしてこのことがモダニティの再帰性にとって決定的な役割を果たしたと考えるのである。

3. グローカル化をともなう諸観念・ 諸事象としての文化

—— R. ロバートソン

R. ロバートソンは、グローバル化を「近代以降」の工業化、資本蓄積、政治的・軍事的官僚制化の延長ないし徹底（非西欧圏への普遍化）とするギデンズの主張を論難する（Robertson 1992）。彼はグローバル化とは、古代にまで遡行できる世界宗教化や中世の大航海に代表されるように、「近代以前」からの長期にわたる歴史的過程であるとしたうえで、「世界の単一の場所への圧縮」を現代におけるその趨勢と捉える。これは一様化された世界文化や世界政府の形成を意味するのではなく、「グローバルな人間的状況」の促進、つまり「四つの構成要素」とされる「国民国家的な諸社会」、「個々の自我」、「諸社会の世界システム」、「人類」の複合的依存関係の稠密化である。

確かにグローバル化の歴史認識の面で、ギデンズとロバートソンの間には齟齬が認められる。しかし後期近代のグローバル化に限っていえば、その同質化の潮流—グローバルな同質性に関しても両者の間で認識に違いがある—に対する反動として地域性、土着性あるいは民族性への関心が増大してきたという主張においては共通している（Giddens 1990；Robertson 1992）。ロバートソンによると、現代における諸種の土着化運動の本質は、グローバル化への抵抗というよりも、グローバルな政治的・文化的「アリーナ」への参入要求にあるという。

それでは、ロバートソンのグローバル化論において文化はどのように位置づけられているのであろうか。彼は所謂「グローバル文化」というものを、近代資本主義経済の物的所産へ安易に還元する見方に異議を唱える（Robertson 1992）。なぜならグローバル文化とは長い歴史をもつものであり、前近代から一貫して「諸文明」、「諸帝国」、そして「国民的諸社会」間の

さまざまな位相および強度での相互作用の所産だからである。

ロバートソンは、とくに現代のグローバル文化について、それを「諸社会、諸伝統の後継者」からの「取捨選択」を経て土着化される諸観念と諸事象、つまり「個別主義の普遍主義化と普遍主義の個別主義化」という二重の過程によって方向づけられるものと捉えている。このような文化の現状を説明するための鍵概念として設定されたのが「グローカル化（glocalization）」である。グローカル化とは、複数の拠点から発信されたグローバルな文化が、ローカルな文化との「相互浸透」をつうじて世界的な規模で土着化される過程を意味する。

グローカル化のなかで地域的主体のアイデンティティに適合するかたちで再編される対象は、文化の形式だけにとどまらず内容にまで及ぶ。つまり「到来し、伝播するモノやコトは、当該社会、個々の社会において、つねに文化的記号としての意味づけをとめないながら存在する」（G. リッツア・丸山編著 2003：231）という傾向である。この事例として興味深いのが日本の「すし」である。すしは今日では西欧社会にも広く普及しているが、その際、日本社会とは異なる具の付け合わせに加えて、独自の「意味づけ」、すなわち再解釈を経たうえで日常的に食されている。後者に関して言えば、すしは「高級料理」ではなく、気軽な「ダイエット食品」・「健康食品」として一般に表象化されている（リッツア・丸山編著 2003）。また、グローカル化は食にとどまらず、若年層向けの音楽やファッションといった「ポピュラー文化」の領域でも顕著であるし、本来、異なる民族的・歴史的コンテクストをもつ冠婚葬祭（例えば西欧由来のクリスマス・イヴやバレンタインデーなど）が日本社会に受容される際にも生じた過程である。

多様な事物・事象の西欧圏および非西欧圏における形式面での折衷、ならびに内容面での再解釈の実態は、生活世界のあらゆる領域がグロー

カル化の一端を担っていることの証左であると同時に、土着化へと至る文化のグローバル化が、けっして単一の発信源（西欧国民社会）に由来する道程ではないということを如実に示している。

4. 実存的に重要な意味構築を ともなう生活秩序としての文化 —— J. トムリンソン

J. トムリンソンは、グローバル化を近代における自明の経験的状況としての「複合的結合性（complex connectivity）」、つまり「近代の社会生活の特徴づける相互結合性と相互依存性のネットワークの急速な発展と果てしない稠密化」（Tomlinson 1999=2000：15）と捉える。

複合的結合性は、流行、人材、資本、慣習、知識、信仰、電子マネーなどのフローの増大と、それらの間での多様かつ多義的な結合様式の出現をともに包摂する概念であり、同時に「多次元性」の概念とも密接に関係している。グローバル化とは、政治、経済、文化、対人関係、技術、環境といった各次元同士が複雑に絡みあいながら展開していく「同時発生的な過程」としても理解されるべき事象なのである。

またトムリンソンは、高速の輸送手段や電子的コミュニケーション技術が可能にする、「離れた地点に移動するときにかかる時間の劇的な短縮によって得られる距離の圧縮感」（Tomlinson 1999=2000：17）のことを「結合性」を呼ぶ。この現象学的な経験は、「近接性」と注意深く区別されている。近接性とは、単に国境横断的な移動とコミュニケーションがもたらす日常的な意識の諸相だけでなく、金融危機や環境破壊といった重大なリスクに人類が否応なく直面している事態、つまりローカルな生活世界に暮らす我々と遠隔地で生じた事象との直接的・間接的な因果関係が強化されていく状況である。

トムリンソンは、「グローバル化の一つの「次元」として見ること」（Tomlinson 1999=2000：33）を強調したうえで、文化を工業生産上の専門用語や金融取引をめぐるマーケット情報のような「道具的象徴化」と見做す立場を批判する。なぜならば、この定義だとあまりにも多くの事物が文化の範疇に含まれてしまい、文化的なものの核心を捉えることが困難に陥るためである。つまり有用性という客観的意味の表現にとどまるシグナル的な記号は、厳密には文化とは見做しえないということである。

逆に実体を帯びた道具的なものであっても、芸術作品や広告のように「人生はどのように生きられるかという物語や、共通のアイデンティティ概念の根拠や、自己イメージのアピールや、「理想」の人間関係像や、人間的な満足や幸福の型などを」（Tomlinson 1999=2000：43）一義の意味として表すシンボリックな記号の場合、十分に文化的なものとしての条件を充たしていることになる。

さらに彼は、文化のグローバル化をコミュニケーション技術の進歩と安易に同一化しているという理由からギデンズの定義に対しても批判的である。トムリンソンの議論において文化は、「被投性（Geworfenheit）」のなかにある「人間が何か象徴的な活動を通じて意味を構築していくような生活の秩序」（Tomlinson 1999=2000：41）と捉えられており、つまりそれは、「実存的に重要な意味」の主体的解釈からは離れられない「現在進行中の人々の「生活物語」に直接寄与する、日常的な活動のすべてを指す」（Tomlinson 1999=2000：44）。

したがってトムリンソンの文化概念は、道具的というよりは身体的象徴化のほうに重点を置いたものと明らかに言えるであろう。

諸個人の「生」の充実に関わるような意味構築を伴う行動様式は、なぜグローバル化にとって文化が重要なのか？また、なぜ文化にとってグローバル化が重要なのか？という、二重の問

題系に取り組むうえで、きわめて有効な文化概念である。ただし前者の説明にあたっては、「我々が文化を「結果を伴うもの」として捉える」(Tomlinson 1999=2000:51)ことが前提条件として求められる。

トムリンソンは、ローカルな個人的・集団的な諸活動のなかで人々が行う「文化的な意味づけや解釈」(Tomlinson 1999=2000:51)によって、グローバルな社会的諸制度の再帰性が結果として導出されると主張する。ここで彼はギデンズによる「制度的再帰性」の議論を、ローカルな文化とグローバルな制度との時空間の壁を越えた多元的接触のコンテクストにおいて、より精緻化しようと試みている。例えば、ファッションに対する我々の解釈内容が重なったことで新しく生じた集合的な購買活動のパターンが、消費者の嗜好の変化として服飾企業本社に参照されることによって、既存のグローバルな生産および流通ネットワークの再編や、世界的な広告戦略の見直しを促していく道程を挙げることができる。

グローバル化にとっての文化の重要性は、「取るに足らぬ多様な個々のローカルな行動……この人間からのインプットに対する制度の再帰的な反応性」(Tomlinson 1999=2000:53)にあると言える。

次にトムリンソンは、文化にとってのグローバル化の重要性を、再帰性を経た近代的社会制度からのアウトプットと言える「脱領土化の日常的経験」におく。「脱領土化(deterritorialization)」とは、文化と場所との「自然な」結合関係の解体過程であり、もはや今日のローカル性が、あらゆるモノとコトが「遠隔化」された影響力によってその現場に「はめ込まれた」特徴となっていること」(Tomlinson 1999=2000:188)を指示している。

したがって脱領土化の概念は、共同体の統合装置として文化を特定の場所と暗黙裡に結びつけてきた「機能主義の伝統」がもつ正当性を衰

退させることになる。

脱領土化による文化的経験とは、グローバルなフローを背景に「転移」してきた「非一場所(non-places)」(匿名性や没永続性に特徴づけられる国際空港のロビー、高速道路とサービスエリア、スーパーマーケット、情報通信業・文化産業を含む外資系資本など)において発信される記号との「多義的解釈」ともなう接触であり、たいていは「コスモポリタンの」な生活様式の様相を呈する。

トムリンソンは、電子メディアを介して私的な生活空間に届けられる遠隔地の事件・事象との不断の接触や、グローバルな食品産業の進出が享受可能にする国際色豊かな食生活などを例示しているが、制度的レベルでの再帰性を背景とするいずれの文化的経験も、物理的な結合性をつねに経験しているわけではない「大多数の人々にとって……一つの場所にいながら、グローバルな近代性が彼らのもとにもたらしてくれる「転移」を経験すること」(Tomlinson 1999=2000:26-7)が契機となっている。

経済的近接性における競争秩序のなかでも「周縁」地域では、しばしば脱領土化された生活空間が「再領土化」されるという逆説的状况が生まれる。このような傾向は、なかでも観光資源として海外からの需要に恵まれている都市に顕著である。トムリンソンは、脱領土化が弁証法的な力関係のなかにあることを強調したうえで、「脱領土化あるところに、再領土化もある」(Tomlinson 1999=2000:258)と指摘する。

再領土化の典型例は、すでに脱領土化された都市の一部あるいは全体を、外部からの「まなざし」を反映させたかたち、すなわち「疑似伝統的空間」として再編するケースである。観光産業と都市行政の利害関係を孕んだ再領土化は、当該地域に暮らす者に対しては、様々な意味の構築をともなう諸実践という重要な文化的影響をもたらす。

トムリンソンが例示するメキシコのティワナにおける「再領土化の日常的経験」は、「火山、アステカ族の絵、サボテン、鷲と蛇」といった観光客のエキゾチシズムを充たすために大量に展示され、また陳列される「由緒正しいものといえるような代物ではない」(Tomlinson 1999=2000:243) シミュラクルとの、様々なコンテキストにおける直接的・間接的関わりである。このローカルな文化的営みにおいて住民たちは、都市の景観や通過する他者(移民労働者や観光客)との関係に対する新たな解釈と意味づけを通して、ティワナを開かれたコスモポリタンな空間として称賛するとともに、自分たちこそが、そのような観光都市としてのブランドイメージを定着させた文化財の所有主体であると強く認識するのである。住民による疑似伝統的記号を介した「アイデンティティ獲得」の経験は、ティワナでこれからも続いていく彼らの人生を、有意義なものにするうえで重要な「意味構築」なのである。

ここまでのトムリンソンの議論の流れから、彼の主体による意味づけや解釈を重視する文化概念は、ローカルな文化とグローバルな諸制度との循環的な相互作用、つまり「個人の行動が、大きな社会の構造的・制度的特徴と、再帰性によって密接に結びつけられているという事実」(Tomlinson 1999=2000:54)を説明するためのツールとして設定されたものであると読み取れるのである。

5. 差異を本質とする集団的

アイデンティティとしての文化

— A. アパデュライ

A. アパデュライは、現行のグローバルな社会的・文化的システムがきわめて複合的かつ予測困難な理由を、経済・政治・文化同士の関係が本質的に乖離している点に求める(Appadurai 1996)。こうしたグローバル世界を構成

する各次元間の根源的な「乖離構造」を把握するための分析枠組みとして、彼は五つの「ランドスケープ(landscape)」を設定する。それは「エスノスケープ(ethnoscapes)」(難民や移民労働者といった越国家的にフローする主体の地景)、「メディアスケープ(mediascapes)」(多様なメディア機関によって身近な生活空間へと日常的に配信される世界に関する虚構の地景)、「テクノスケープ(technoscapes)」(熟練ないし非熟練労働者の国際労働市場への参入を加速させる機械的・電子的技術の流動的な布置状況と越国家的な高速移動)、「ファイナンスケープ(finanscapes)」(国債市場における投機的取引によって、膨大な金融資本が国家経済にかつてないほど急速に流出入する状況)、「イデオスケープ(ideoscapes)」(啓蒙主義的な概念と思想から成る所謂「大きな物語」や、既成の国家権力への対抗的観念が世界中に拡散する状況)である。

アパデュライは五つの要素に共通する特徴として、国境を超えるフローが流動的かつ不規則であること、複合的な相互関係が無数の観察者の視覚に応じて、つまり多様な解釈によって「構築」されること、互いの活動を媒介しあう関係にあるとともに逆に制限しあう関係にもあること、深層においては相互に乖離していることを挙げる。彼の議論にしたがえば、「暴走する世界」(Giddens 1991)とも形容できる今日の不確定で予測困難なグローバル世界は、ランドスケープ間の「乖離構造の増大にあわせて生起している」(Appadurai 1996=2004:77)ということになる。

なかでもメディアスケープとイデオスケープは、ともにイメージの連鎖であるということ以外に、グローバルな人間生活の実際の諸局面でもきわめて相即的な関係にある。

まず、ラジオ、テレビ、新聞、ファックス、電子メールなどは、対立するエスノスケープと政府勢力にとって互いのイデオスケープを表明

するための中継手段として利用される。

このケースは、カナダ（ケベック州）、スペイン（バスク地方）、コソボ、ルワンダ、チェチェンといった nation state による一元的統合の観念と独立を志向する本来多元的な nation との相克や矛盾が顕著な地域に該当する。また、イデオスケーブは知識人が「ディアスポラ」した際に最も流動性を増すが、彼らがあらゆるメディアを介して自らの見解や思想を発信することのもつ既成権力に対する転覆の影響力は無視できないものである。

さらに電子メディアの急速な進歩は、戦争やギャングを題材とする映画の暴力的なイメージの断片によって、「男らしさ」と「男根主義」の夢想が消費者の間で巧みに強化される側面だけでなく、アパデュライが「仮想的近接」と呼ぶ電子的コミュニケーションの共同体を舞台とした民族的諸観念の再認識過程とも密接に関係している。仮想的近接は、離散民同士のリアルタイムでの非対面的交流をつうじて nationhood を深化させる。インターネットの「電子掲示板を通して実現可能になる、議論や対話、関係構築によって、領土上は分断されている多様な個人が、それにもかかわらず、自らのディアスポラ的な立場や発言にふさわしい、想像力と関心の共同体を形成しつつある」（Appadurai 1996=2004 : 346）。

アパデュライは、文化を物質的あるいは形而上的な実体と捉える見方に疑義を呈したうえで、F. ソシュールが先鞭をつけた「構造主義（structuralism）」（同じ体系のもとに配列された言語間の示差的関係を通して、各項の価値が決定されるとする思想）の成果である「差異」の視座こそが現代の文化を把握するための最大の鍵と位置付ける。アパデュライにとって文化とは、差異による価値創出に特徴づけられる「対比的特性」、つまりローカルな具体的脈絡における「差異に基礎づけられた集団的アイデンティティ」（Appadurai 1996=2004 : 40）であ

る。これらの担い手となるのは、一国民社会内に自発的あるいは強制的に包摂された多様な民族である。民族的アイデンティティとしての文化は、国民的アイデンティティとの差異（対比）のもとで最も先鋭的にその集合的で歴史的な価値を強固にし、また著しく動揺させる。

諸民族の文化的差異は、同化政策のような国民国家側の働きかけによって促される。ナショナルな物理的環境に生活の足場を置かざるをえない各民族は、諸種の国家的装置によって流布される国民的アイデンティティへの帰属をめぐる意思決定を再帰的に実践している。「民族的多様性を包摂して、固定的で閉鎖的な文化的カテゴリー群に転換し、多くの個人を強制的にそこへ帰属させようとする国家の活動に、多くの集団が直面している。そうした集団は、アイデンティティの基準にしたがい、意識的に自己動員をはかっている」（Appadurai 1996=2004 : 40）。

差異を基軸とする集団的アイデンティティは、アパデュライの言葉を借りるならば、ときに「反ナショナル的」な傾向を帯びる。既成の国民国家政府に迫られたアイデンティティの選択の方向次第では、紛争やテロルの蓋然性が一気に高まることになる。こうした民族的暴力が諸勢力の意思決定によって惹起してしまう背景には、「どの国民—国家も真実にはたった一つの民族しか代表しえないという観念と、すべての国民—国家が歴史的には多くのアイデンティティの融合を内包しているという現実との矛盾」（Appadurai 1996=2004 : 277）がある。

アパデュライの五つのランドスケープを中心に据えたグローバル化論の目的は、越国家的なフローの状況や諸次元間の乖離構造の解明だけでなく、「グローバルな文化的プロセスに関する一般理論」をそのもとに基礎づけていくことにも向けられている。現代における文化的なものとの相互作用に力点を置いた理論に学際的な説得力をもたせるためには、従

来の文化に対する境界性や安定性のイメージからフラクタル性およびカオス性のイメージへ転換させたうえで、それら巨視的な文化観を微視的な実際の諸事象と関連付けていく必要性をアパデュライは指摘する。

このような提言は、ディアスポラの増進、仮想的近接の発達、銃火器の国際的取引といったグローバルなフローのなかで、ますます文化が「フラクタル的に形成され、さらに地球規模の空間で多項的に重なり合いつつもある」（Appadurai 1996=2004：93）という彼自身の現状認識から導出されたものと言えよう。

6. 文化的なものに通底する共時性

いくつかの代表的なグローバル化論において提起された文化概念を鑑みることによって、現代の文化的なものを背後から規定する特性がある程度、焦点化されたのではないだろうか。それは、観念、倫理、アイデンティティといった個人あるいは集団レベルの表象—自覚的・非自覚的な意味の両方を含む—を言語や身体を介して代理的に伝達し、同時にそれらを成員の間で喚起・連想させる「シンボル性」である。

我々が文化と関わるうえで、「記号とその意味を解釈するという作業をまぬがれない」（宮島編 1995：54）以上、地球の規模での社会変動のなかで、どれだけその形式や内容が国民社会に「埋め込まれていた」時期よりも流動化しまた多元化しても、主観に関わる意味の表現、解釈、集合的喚起という一連の過程に規定されるシンボル性は、文化的なものに通底する普遍的な側面なのである。

本稿で概説してきたグローバル化論の脈絡における文化概念（近代的諸制度に背景化された相互行為、形式と内容の両面で土着化される様々なモノとコト、実存的に重要な意味構築をともなう生活秩序、示差的関係にもとづく集団的アイデンティティ）は、反目しあう部分はあるも

の、結局いくつかのシンボリックな「記号体系」へ収斂させることができる。

内部および外部からの「象徴的な意味づけ」を経て土着化される消費財や観光資源としての空間も、個別のコンテクストを背景として一市民および一民族単位で実存と密接に関わる諸表象を伝達する消費、労働、社会運動を含む多元的な行動様式も、社会的システムの広範囲に及ぶ再帰性に深く関与している。グローバルな社会的なものの再編は、その内部における重層的關係だけでなく、文化的なものに特有のシンボル性及び時空間の拡大—輸送とコミュニケーション技術の革新、文化産業に対する都市行政機構による支援策、民族や知識人によるディアスポラの増進といった諸条件を背景とする—によっても大きく制約されているのである。

したがって我々は、今日の文化的なものの根源にあるシンボル性に焦点化することで、社会的なものとの相互再帰性—どちらもグローバルに生起する場合もあれば、文化的なものの変化がローカルな位相でのみ生起する場合もある—という循環過程をもカバーする文化に関する理論研究を前進できるのである。

最後に、超国家的規模での社会変動を直接対象とするグローバル化論は、暗黙裡に社会を国民国家と同一視してきた20世紀中葉までの社会学理論の延長上に布置できるものである。さらに、現代における文化的次元の記号作用や社会的次元との相互作用のダイナミズムについても扱う、多次元性を重視するグローバル化論は、カルチュラルターンの見地に立った存在論へと従来の社会学理論を止揚させる「宿駅」、すなわち媒介項としての重要な役割を今後担っていくことになるであろう。

文 献

- Appadurai, A, 1996, *Modernity at Large: Cultural Dimension of Globalization*, University of Minnesota Press. (=2004, 門田健一訳『さまざまの近代—グローバル化の文化研究』平凡

- 社.)
- Durkheim, É, 1912, *Les Forms élémentaires de la religieuse : le système totémique en Australie*, Presses Universitaires de France. (=1975, 古野清人訳『宗教生活の原初形態』上・下, 岩波書店.)
- Eagleton, T, 2001, *Was ist Kultur?*, Beck C. H. (=2006, 大橋洋一訳『文化とは何か』松柏社.)
- Giddens, A, 1990, *The Consequences of Modernity*, Polity Press. (=1993, 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か? — モダニティの帰結』而立書房.)
- , 1991, *Modernity and self identity : self and society in the Late modern Age*, Stanford University Press. (=2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ — 後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)
- 井上俊・伊藤公雄編, 2009, 『文化の社会学』世界思想社.
- 伊豫谷登士翁, 2001, 『グローバリゼーションと移民』有信堂.
- 川本茂雄・田島節夫・坂本百大・川野 洋・磯谷孝編, 1982, 『講座・記号論 3 記号としての芸術』勁草書房.
- Krober, A. F. and C. Kluckhohn, 1952, *Culture : A Critical Review of Concepts and Definitions*, Vintage Books.
- Langer, S. K, 1957, *philosophy in a New Key, a Study in the Symbolism of Reason, Rite, and Art*, Harvard University Press. (=1960, 矢野萬里・池上保太・貴志謙二・近藤洋逸訳『シンボルの哲学』岩波書店.)
- 丸山哲央, 2010, 『文化のグローバル化 — 変容する人間世界』ミネルヴァ書房.
- Mauss, M, 1925, *Essais sur le don Forme et raison de l'échange dans les sociétés archaïques, L'Année Sociologiques*, nouvelle série, 1. (=2009, 吉田禎吾・江川純一訳『贈与論』ちくま学芸文庫.)
- 宮島 喬, 2005, 『現代社会学 — 改訂版』有斐閣.
- Parsons, T, 1961, "Introduction to Part 4 (Culture and the Social System)", in T. Parsons, E. Shils, K. D. Naeyegele & J. R. Pitts (eds.), *Theories of Society*. (=1991, 丸山哲央訳『文化システム論』ミネルヴァ書房.)
- リッツア, G.・丸山哲夫編著, 2003, 『マクドナルド化と日本』ミネルヴァ書房.
- Robertson, R, 1992, *Globalization : Social Theory and Global Culture*, Sage. (=1997, 阿部美哉訳『グローバリゼーション — 地球文化の社会学理論』東京大学出版会.)
- 佐藤健二・吉見俊哉編, 2007, 『文化の社会学』有斐閣アルマ.
- Simmel, G, 1911, *Der Begriff und die Tragödie der Kultur, Logos*. (=1987, 阿閉吉男編『文化の概念と悲劇』『ジンメル文化論』文化書房博文社, 19-62.)
- Tomlinson, J, 1999, *Globalization and Culture*, University of Chicago Press. (=2000, 片岡信訳『グローバリゼーション — 文化帝国主義を超えて』青土社.)
- 薄井 崧・丸山哲夫・大野道邦・橋本和幸編, 2000, 『社会学の理論』有斐閣.
- Weber, M, 1920, *The Protestant Ethic and the spirit of capitalism*, Sage. (=1989, 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫.)
- , 1922, *Soziologische Grundbegriffe, Wirtschaft und Gesellschaft*, J. C. B. Mohr. (=1972, 清水幾太郎訳『社会学の根本概念』岩波文庫.)

(しらいし てつろう)

社会学研究科博士課程)